

# JISS

2010



**[特集]**

## 第1回ユースオリンピック競技大会 2010/シンガポール

IOCが始めた若者たちの新しいスポーツの祭典を総力レポート

第1回ユースオリンピック競技大会  
トライアスロン優勝  
佐藤優香選手  
(トーンパートナーズ・チームケンズ)

表2 実施競技・会場

競技名／開・閉会式	競技会場
開・閉会式	The Float@Marina Bay
陸上競技	Bishan Stadium
水泳	
競泳	Singapore Sports School
飛込み	Toa Payoh Swimming Complex
サッカー	Jalan Besar Stadium
テニス	Kallang Tennis Centre
ボート	Marina Reservoir
ホッケー	Sengkang Hockey Stadium
ボクシング	International Convention Centre
バレーボール	Toa Payoh Sports Hall
体操	
体操	
新体操	Bishan Sports Hall
トランポリン	
バスケットボール (3 on 3)	Scape Youth Space
レスリング	International Convention Centre
セーリング	National Sailing Centre
ウェイトリフティング	Toa Payoh Sports Hall
ハンドボール	International Convention Centre
自転車	
トラック	
男子	Tampines Bike Park
女子	The Float@Marina Bay
ロードレース	The Float@Marina Bay
マウンテンバイク	Tampines Bike Park
BMX	Tampines Bike Park
卓球	Singapore Indoor Stadium
馬術	Singapore Turf Club Riding Centre
フェンシング	International Convention Centre
柔道	International Convention Centre
バドミントン	Singapore Indoor Stadium
射撃	Singapore Sports School
近代五種	Singapore Sports School
カヌー	Marina Reservoir
アーチェリー	Kallang Field
テコンドー	International Convention Centre
トライアスロン	East Coast Park



IOCジャック・ロゲ会長

写真:アフロ

表1 日本代表選手団メダル獲得者

順位	1位 (金メダル)	2位 (銀メダル)	3位 (銅メダル)
競技・種目・選手名	体操/体操 ◆男子個人総合 神本 雄也  レスリング ◆男子フリースタイル54kg級 高橋 侑希 ◆女子フリースタイル46kg級 宮原 優  卓球 ◆男子シングルス 丹羽 孝希  柔道 ◆男子100kg級 五十嵐 涼亮 ◆女子63kg級 田代 未来  トライアスロン ◆女子 佐藤 優香  卓球 ◆大陸別混合チーム 丹羽 孝希、谷岡 あゆか	陸上競技 ◆男子100m 梨本 真輝 ◆男子200m 本間 圭祐 ◆男子走幅跳 松原 奨 ◆女子3000m 久馬 萌  体操/体操 ◆男子種目別つり輪 神本 雄也	水泳 ◆女子200m平泳ぎ 浜野 麻綾  体操/トランポリン ◆男子 棟朝 銀河 ◆女子 土井畑 知里
獲得数	8	5	3
NOC混合チームで出場した種目			
競技・種目・選手名	柔道 ◆大陸別混合団体 田代 未来		
獲得数	1	0	0



開会式

写真:AP/アフロ

## 第1回ユースオリンピック競技大会 (2010/シンガポール) 205カ国・地域から26競技に3528人が参加

国際オリンピック委員会(IOC)が創設したユースオリンピックゲームズの第1回夏季競技大会は、2010年8月14日〜26日の13日間、シンガポールにおいて開催された。対象となった競技者は年齢が14歳から18歳まで。205カ国・地域から26競技201種目に、3528人の競技者が参加した。

ユースオリンピック競技大会(以下、YOG)は、現IOC会長のジャック・ロゲ氏の強いリーダーシップにより実現したと言われている。ロゲ氏は、ユース世代における総合競技大会の重要性を認識し、1990年代にヨーロッパオリンピック委員会の会長のとき、ヨーロッパユースオリンピックフェスティバルを創始している。

YOGの開催が正式決定されたのは2007年の第119回IOC総会でのこと。この時、ロゲ氏は「YOGは、オリンピックの価値に基づく教育が及ぶ範囲を広げてくれる」というスピーチを行っている。

YOGプロジェクトのビジョンは、スポーツと文化、教育を総合するスポーツイベントを創出することにある。そのため、文化・教育プログラム(CEP)が準備され、競技者は5つのテーマから構成される7つのタイプの文化・教育プログラムに参加することを義務づけられた。文化・教育プログラムこそ、YOGのもっとも特徴的なプログラムであり、これが成功するかどうか大きなキープポイントの一つであった。

5つのテーマは以下の通り。

- ・オリンピック——オリンピック競技大会の起源、哲学、組織、今日のオリンピックに至るまでの発展の過程をたどる。
- ・スキル開発——自己開発や人生における転換期における対処法など、プロのスポーツ選手のキャリアについてさまざまな面を考察する。
- ・幸福で健康なライフスタイル——健康的な食生活やストレスの対処法、スポーツにおけるドーピング防止に関する議論を推進する。
- ・社会的責任——責任ある地球市民として、環境問題、持続可能な開発、地域社会について考察する。
- ・表現——デジタルメディアやユースオリンピック選手村で行われる夜の祭典イベント、フェスティバルへの参加を通じて、学習および交流の機会を提供する。

これらの5つの教育的テーマに基づき、文化・教育プログラム活動は、7つの提供形式(チャレピオンとの会話・ディスカバリー活動・ワールドカルチャーピレッジ・コミュニケーションプロジェクト・芸術と文化・アイランドアドベンチャー・探検旅行)で構成された活動プログラムが用意された。

一般的にオリンピックに出場する競技者とコーチは、出場する競技・種目が開催される期間のみ現地に入り、終われば帰国する。しかし、YOGは、次世代を担う若者を対象とした新しい形のオリンピックであり、参加した競技者とコーチは、全日程期間選手村に滞在することが義務づけられた。

YOGは、スポーツと文化、教育を統合するイベントとすることを目的としており、「卓越」「友情」「尊重」という三つのオリンピックの核心的な価値をキーワードとし、全日程参加することで初めてこれらを体験し、具現化できると考えられたからである。

日本は、71名(男子25名・女子46名)が16競技(陸上競技・水泳・テニス・ボート・バレーボール・体操・バスケットボール・レスリング・セーリング・ウエイトリフティング・自転車・卓球・柔道・バドミントン・アーチェリー・トライアスロン)に参加した。

トライアスロンの佐藤優香選手が大会第一号となる金メダルを獲得。そのほか8人の選手が1位となり、日本は通算で9個の金メダル、5個の銀メダル、3個の銅メダルを獲得した。

## 競技

### 大陸別混合チームで 覇を競う種目もあり

**教育的要素をふんだんに取りこんだ  
YOG**

YOG(ユースオリンピックゲームズ)はジャック・ロゲIOC会長が青少年にもオリンピックを体験させようという提案から始まったと言われています。ロゲ会長はユース世代における大会の重要性について早くから認識し、ヨーロッパオリンピック委員会会長をつとめていた当時ヨーロッパユースオリンピックフェスティバルの開催を実現させています。そのような背景もあり、IOC会長に就任した当初からYOGに関する構想を持っていたと考えられます。YOGの開催が決定された2007年のIOC総会で、ロゲ会長は「オリンピックを時間の流れと共に変革させていかなくてはならない。そのためには現在の若い世代の感覚にオリンピックを合わせる必要がある」と述べ、次世代、次々世代にも我々のムーブメントが可能な限り意味があるもの

として受け止められなければならない」という開会のスピーチをしています。

そして、2010年8月14日(土)から26日(木)の期間、シンガポールにおいてYOG第1回夏季競技大会が開催されました。対象となった参加競技者の年齢は14歳から18歳までの若者です。日本からは71名(男子25名、女子46名)が派遣され、16競技(陸上競技・水泳・テニス・ボート・バレーボール・体操・バスケットボール・レスリング・セーリング・ウエイトリフティング・自転車・卓球・柔道・バドミントン・アーチエリー・トラリアスロン)に参加しました。

YOGは次世代を担う若者を対象とした新しい形のオリンピックです。スポーツ、教育、文化をバランスよく提供するスポーツイベントとして、競技の実施に加え50を超える文化・教育プログラムが実施されました。YOGでは、エクセレンス(卓越)、フレンドシップ(友情)、リスペクト(信頼)という3つのオリンピックの核心的価値が重要な役割を果たしました。オリンピック憲章にも「スポーツを文化や教育と融合させるオリンピックが求めるものは、努力のうちに見出される喜び、良い手本となる教育的価値、普遍的・基本的・倫理的諸原則の尊重などに基づいた生き方の創造である」という文言があります。これらを反映させたイベントを数多く行っただけですが、IOCにとって新しい試みでした。

バスケットボールのスリー・オン・スリー(3人対3人の競技)やトラリアスロンのリレー(男女混合)などのオリンピックでは実施されていない種目も行われました。

また、各種目の中では大陸別で混合チームを作る種目がありました。柔道、トラリアスロン、フェンシング、馬術などです。選手たちも非常に楽しそうでした。国を代表して戦うことが従来のオリンピックでしたが、この種目では国を超えて喜びなどを分かち合うことができるからです。大人の視点から見ても、非常に興味深いものでしたし、トップスポーツの新しい価値観を感じさせてくれました。

#### 金メダル第一号は日本の佐藤選手

初めての開催ということもあり、どのような収穫が得られるのかは未知数ではありましたが、各国のスタッフや選手にとっては手さぐりで大会本番を迎えたところもあったかと思えます。しかし、大会初の決勝種目となったトラリアスロン女子で、佐藤優香選手(トリーシバートナース・チームケンズ)が1時間0分49秒で優勝。YOG初の金メダルを日本にもたらしました。この歴史的な快挙により彼女は「躍時の人」となり、シンガポールの地元メディアにも数多く取り上げられました。また、日本の国旗を持って走る彼女の姿は世界中に配信されました。

佐藤選手を手始めに、レスリング女子46キログ級の宮原優選手(安部学院高校)、同男子54キログ級の高橋希選手(いなべ総合学園高校)、体操男子個人総合の神本雄也選手(明星高校)、卓球男子シングルの丹羽孝希選手(青森山田高校)、同混合チームの丹羽選手、谷岡あゆか選手(帝京高校・エリートアカデミー)、柔道男子100



キログ級の五十嵐涼亮選手(国士館高校)、同女子63キログ級の田代未来選手(淑徳高校)が金メダルを獲得。計8個となりました。

銀メダルは陸上競技の男子100メートル・梨本真輝選手(市立船橋高校)、同200メートル・本間圭祐選手(市立橋高校)ら計5個を獲得。銅メダルは競泳女子200メートル平泳ぎの浜野麻綾選手(武南学園高校・スウィン大宮スイミングスクール)、トランポリン男子・棟朝銀河選手(明大明治高校)、同女子・土井知里選手(帝塚山学院高校)の3選手が獲得しました。メダル総数は16となり、メダル総数では国・地域別で7位でした(その他、柔道の大陸別混合団体種目で田代未来選手が金メダルを獲得)。ちなみに2008年の北京オリンピックでは204の国と地域からおおよそ1万1000人が参加、28競技302種目が行われました。日本のメダル総数は25(金9、銀6、銅10)、国・地域別で8位でした。

JOCのエリートアカデミー事業で育った宮原優選手や谷岡あゆか選手が結果を残したことも、我が国の国際競技力向上を考えるうえで大きな出来事でした。また、日本の11地域でタレント発掘・育成事業を2つのチームとして「日本代表」という看板を背負って戦う重みを知ったと思います。10代のうちから「チームジャパン」の重みを知ることは大きなことだと思います。コーチ陣も若い人材が多数そろい、経験を積みました。いずれ、次々回のオリンピックを戦うかもしれない人材です。チームジャパンを背負った戦い方を知ったのは貴重な経験でした。

また、今回のYOGで「世界で勝つことを知ることがどれほど大きなことかを実感しました。たとえばメダルセレモニーです。YOGでも従来のオリンピックと同じように国歌が流れ、国旗が掲揚されました。そのように自国が称えられる場面を見た時の感動は、言葉では言い表せないものです。それを見た選手は純粋に「勝ちたい」と思っています。勝った選手は「(ロンドン、リオの)オリンピックでも勝ちたい」と思っています。次のステップの弾みになります。実際に、メダルを獲得した選手や関係者の中には「2012年のロンドンが見えてきた」「2016年のリオが見えてきた」という声も聞きました。

ただ、YOGは選手やスタッフにとって大きなチャンスでもありますが、その土俵に至る前のケアを今後どうするかが課題であると感じました。高校生の選手にとって進路を決定する大事な時期になります。今回のYOGは8月に開催されました。国体やインターハイの時期とも重なってきます。高校の指導者がスタッフである場合、学校を優先するか、こちらを優先するかの問題も出てくるでしょう。これらの大会の結果が大学の進路に大きく影響するだけに、出場すること自体を悩んだ選手もいたかもしれません。国体、インターハイも大事ですが、その先にある世界を見せるという経験も大事です。そのあたりの問題をどうするか、我が国のスポーツに関

展開していますが、子どもたちに示すべきエリート選手像が少しずつ見えてくるのではないかと感じています。

#### 10代で世界を体験することの意義

初めてのYOGですので、今回の結果については安易に「良かった」「悪かった」と断言することはできないと思います。全体を見渡すと、従来のオリンピックに比べ多くの国にメダルが分散しました。北京オリンピックでは上位20カ国におおよそ70パーセントのメダルが集中していましたが、今回は60パーセント程度でした。メダルを獲得した国の数も、北京では86カ国でしたが今回は100カ国でした。

しかし、メダルが分散したのは競技自体のレベルなどの問題ではないと感じます。これが原因か、と考えられる点が二つあります。一つは参加者数の制限です。個人競技の選手は、1カ国70人しか参加できず、かつ種目毎でも制限があります。もう一つは、大陸別団体や男女混合などの種目でさまざまな国の選手にメダルが行きわたったことです。従来のオリンピックではメダルに届かなかった国も当然あるわけですが、そのような国にメダルが行きわたることで多くの国にオリンピックをアピールする機会にもなりました。

また、国際競技力向上を考える上で、「チームジャパン」として戦うことを体験できたことも選手たちにこれ以上ないほどの経験となったかと思えます。選手たちが今まで経験してきた主要な大会は、たとえば年代別の世界選手権、年代別のアジア選手権などです。オリンピックのように他競技の選手と交わる機会を持った国際総合競技大会には参加したことはありません。JOCの関係者や他の競技の選手などが応援に来てくれる中、日本という一

わる人々すべてが、考えていかなければならないと感じました。

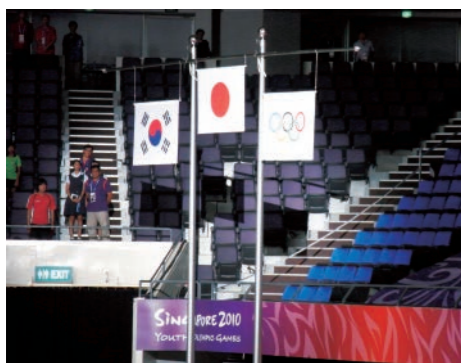
ジャック・ロゲ会長の肝いりで始まったYOGですが、出場者の年代は違えど、オリンピックそのものでした。開催前は教育的要素への配慮から競技色が薄まるのではないかと声もありましたが、おむね高いレベルで競技が行われていたと思います。これからYOGは教育的要素と競技的要素のバランスをとりながら発展していくと思いますが、日本の選手たちもこのチャンスを大いに活用できるような体制づくりが大切であると感じました。



大陸別混合チームで競った種目の表彰式



今大会のメダル



センターボールに形容される日本国旗

## 新しい試み。 文化・教育プログラム（CEP）

**狙いはオリンピックの素養を身につけること**

今までオリンピックに出場していた選手とコーチは、出場する競技・種目が開催される期間のみ現地入りし、終われば帰国するのが一般的でした。しかしYOGでは、選手たちは全日程期間滞在すること、義務づけられ、なるべく多くのCEP（文化・教育プログラム）へ参加してました。

CEPは、楽しく交流できる活動を通じて選手たちにオリンピックの意義を学んでもらうものです。そして、これらの意義をどう日常生活に反映できるかを考えてもらい将来オリンピックになるための素養を身につけてもらうことが目的です。具体的には以下の4点についての実現をめざします。

・オリンピズム、オリンピックムーブメン

ト、そして地球とスポーツの問題を学ぶことができる。

・将来を自分自身で思い描くことによって、自分の周りの人々と環境に良い影響を与えることができる。

・他の参加者との交流を通じ、新しいアイデアを学び、新しい文化に触れることができる。

・多様な文化と人々をひとつにするオリンピック精神の力を実感することによって、オリンピックの意義、そして世界の文化の多様性を称えることができる。

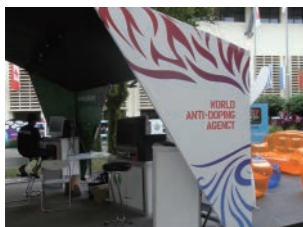
CEP活動は、選手たちにオリンピックの意義をより良く認識し、実感してもらうため以下の5つの主なテーマに沿って行われました。すなわち、オリンピズム、スキル開発、幸福で健康なライフスタイル、社会的責任、表現の5つです。これら5つのテーマに基づき、12日間の競技大会期間中、選手たちのために50以上のCEP活動が用意されました。

CEP活動は、7つのフォーマットで提供されました。YOV内5つ、YOV外に2つ用意されました(表3)。

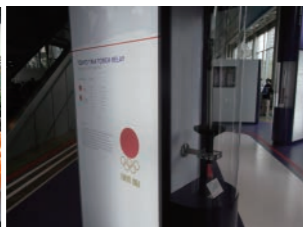
**言葉が通じなくても交流は大いに可能**

選手たちからは、おおむね「面白かった」などポジティブな感想を聞くことができました。このようなイベントを通じて、尊敬するオリンピックたちやさまざまな文化を持った国の同年代の人たちと交流を持てたことは新鮮だったと思います。

ただ、一言語の問題が出てきました。とくに日本を含めアジア圏の人たちは、他の地域の人とのランゲージバリアが少し高いと感じます。オリンピックでの公用語はフランス語と英語です。他国の人たちに「お互いがんばろう」「おめでとう」と話



オリンピックギャラリー



オリンピックギャラリー



チャンピオンとの会話



探検旅行



アイランドアドベンチャーのワークショップ



ワールドカルチャービレッジ

しかけられても、返す言葉がまったく出ない場合もありました。そのあたりは、選手たちの間から「言葉を知っておけばよかった」などの声が聞かれました。

しかし、言葉が知らなくても身振り手振り、表情でコミュニケーションをとっている選手はいました。世界の舞台上で活躍するために言語力も必要なのかもしれませんが、そこでどれだけのことを吸収しようとする意欲を持っているかどうかのほうが大切ではないかと感じました。どの国にも、言葉が知らなくてもがんばってこ

ミュニケーションをとる人、「こんな面白くないよ」と、気の合う相手とだけ楽しむ人、両方がいました。YOGのような多くの人が集まるところで、どれだけ楽しんで吸収できるか、成長に差が出るのかもしれない。

地元シンガポールの子どもたちにも選手村の一部が解放され、試合観戦や競技体験のコーナーで楽しんでいました。われわれ日本人がかつて東京オリンピックで受けたインパクトを、彼らに与えられたかどうか…。彼らの成長につながってほしいと願っています。

**我が国がYOGを財産にするには**

ジャック・ロケ会長は開会式のスピーチで参加選手に対し、「(今大会で)あなた達は、勝利することチャンピオンになることは異なるということを学ぶでしょう。勝つためにはゴールラインを最初に越える必要がありますが、チャンピオンになるといことは、身体的な能力だけでなく、あなたの人格への賞賛も呼び起こさなければなりません。もし、同年代の若者のロールモデルとしてあなた達が振舞う準備ができたのであれば、順位に関係なく、あなた達はチャンピオンになるでしょう」とメッセージを送っています。

彼は、YOGを語る際に一貫して、単に試合に勝つことではなく、人間として模範となるような人材となることを強調しています。

自分の競技を終えたアスリートには、アイランドアドベンチャーが提供する屋外活動をぜひ楽しんでいただきたい。参加者はチームになって、自信形成コースや水を使った活動、体力チャレンジに挑むことになる。訓練を受けたインストラクターの下、これらのチャレンジを克服するためには、チームワーク、相互信頼、そして友情が不可欠である。冒険は午前中から始まり、フェリーですぐに行けるシンガポール沖の島々のひとつ、ウビン島 (Pulau Ubin) に向かう (Palau という言葉は、シンガポールの4つの公用語のひとつであるマレー語で、島という意味である。マレー語は、マレーシア、ブルネイおよびインドネシアを含む近隣諸国で広く使われている)。島に着いたアスリートたちは、さまざまな楽しい活動に参加する。大きなドラム缶と棒、ロープを使っていかだを作ったり、チームでボートこぎ競争をしたり、ロッククライミングや「逆さタワー」ロープコース等に挑戦することもできる。さらに、島に生息するフルーツや動植物の説明も受けることができる。アイランドアドベンチャーに参加するアスリートは、水筒とタオル、着替え、そして水を使った活動用の靴を用意すること。活動後、顔や手を洗って着替えることができる。昼食はウビン島で提供され、夕食は選手村に戻ってからとる。

アスリートは、シンガポールの最新環境テーマパークであるホートパークおよびマリナー・パレッジへの半日の探検旅行に参加することができる。ホートパークでは、テラリウム・ワークショップとガーデンツアーに参加することができる。テラリウム・ワークショップでは、アスリートは地球の生態系を真似たミニ・ガーデンをガラス瓶の中で作ることによって、自然の生態系の重要性に触れることができる。ガーデンツアーでは、アスリートは、2つの庭園を訪問し、具体的な環境問題について学ぶ。参加者たちは、母国における環境イニシアチブについて、考察や議論する機会を得る。また、両庭園においては、アスリートを対象とする実践的活動も予定されている。

マリナー・パレッジにおいてアスリートは、マリナー湾のウォーターフロントとシンガポールの都市スカイラインを望む絶景を楽しむことのできるユニークな場所で行われる4つの活動を通じて、持続可能な水管理を学ぶことができる。この旅行にはギャラリーおよびグリーンルーフへのツアーが含まれ、アスリートたちはここで、地球の生態系に対する脅威と環境を守るための案に焦点を当てたインタラクティブな展示を探索することができる。

アスリートはまた、水とエネルギーをテーマにした3つのチャレンジを体験することができる。このような体験型の楽しい活動を通じて、アスリートたちは飲料に適した水が非常に少ないということ、水質汚染の結果、そして再生可能でクリーンなエネルギー源を使用することの利点に対する認識を深めることができる。

# JISS広報ブースにお立ち寄りください

JISSのPR活動の場として、また、JISSの新たなランドマークとして、さまざまな情報を発信するための広報ブースが正面エントランスに完成しました。

ブースはJISSコーナー、競技団体コーナー、NAASH（独立行政法人日本スポーツ振興センター）コーナー、秩父宮記念スポーツ博物館サテライトコーナーの4つのコーナーから構成されています。

JISSの行っているさまざまな事業や活動を紹介するJISSコーナーでは、今年行われたバンクーバー五輪におけるJISSのサポートについて紹介しています。研究員が実際の現場で活動している様子や、レース分析の様子などを分かりやすく紹介し、また、その斬新なデザインが話題になったスピードスケートナショナルチームのレーシングスーツや、日本代表選手団公式ウェアのダウンジャケット、国際オリンピック委員会から競技者及びスタッフに贈られる五輪参加メダルなども見ることが可能です。

JISSのサポートを受けたりJISS内の練習施設を利用して日タトレニングに励む競技団体について、その競技内容や活動を紹介します。競技団体コーナーでは、今回、フェンシングの種目とルールについて紹介しています。

JISS以外の日本スポーツ振興センターの事業をアピールするNAASHコーナーでは、totoのスポーツ振興の理念とBIGの6億円当せんチケット（レブリカ）を展示しています。

スポーツ博物館サテライトコーナーでは、国立競技場内にある秩父宮記念スポーツ博物館の貴重な所蔵品を展示しています。「スポーツの宮様」として広く国民に親しまれた秩父宮殿下にまつわるラグ

ビーの関連資料と、バンクーバー五輪に関連し、「下駄スケート」などの古い時代のスケート靴などを展示しています。

他にも、60インチのモニターを配置し、JISS・味の素の紹介VTRとtotoの理念CMの映像を放映しており、一般の方はもちろんのこと、練習に訪れるアスリートや関係者の目を引いています。

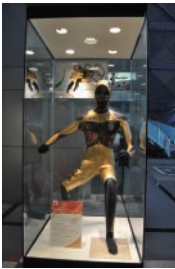
最後に、この広報ブースの設置に当たってご協力いただきました競技団体等の関係各位の方々にお礼申し上げます。皆様も来館された際には是非一度ご覧ください。



6億円当せんチケットを拝んでから受付で購入！



フェンシングの種目について紹介しています



五輪期間中話題になったレーシングスーツ

## スポーツと スマイルの町を、 日本中に。

勝つとか、負けるとか。上手いとか、上手くないとか。  
大事なのは、そんなことじゃなくて。

人が、笑顔になる。  
それが、スポーツの最もすばらしい力だと思います。

スポーツの住む町を、スポーツを楽しめる環境を、日本中に。  
それがわたしたちの、変わることのない思いです。

信じよう。スポーツの力を。



**toto** **BIG** の収益は、  
グラウンドの  
芝生化などに、  
役立てられています。

www.toto-dream.com 19歳未満の方の購入又は譲り受けは法律で禁じられています。私営金も受け取れません。運営・販売：独立行政法人日本スポーツ振興センター

News Letter

**JISS**  
2010

**JISS** 国立スポーツ科学センター

ニュースレターJISS 2010 平成22年11月30日発行  
発行 独立行政法人日本スポーツ振興センター国立スポーツ科学センター  
編集・発行者 岩上安孝  
〒115-0056 東京都北区西が丘3-15-1 <http://naash.go.jp/jiss/>  
編集協力 株式会社小林事務所、山岸淳デザイン株式会社、柳田直子